文学的素養ということ

堀井　謙一

かつて、次のような体験を、文学理論の授業のテストでしたことがある。

荒木田守武の次の句を掲げて文学理論に関する問を発した。

落花枝にかへると見れば胡蝶かな

採点の途中で「蛙が枝にいて云々」という答案が出てきたので、「変な学生だな」と思いつつ、当然のことながら不正解にして先に進むと、さらに「蝶々を蛙に間違えて云々」とくる。こうも何匹も蛙が飛び出すと、何か学生がグループになって悪ふざけをしているのではないかと不安にもなる。

が、句を見ていて「あっ」と気が付いたことには、たしかにこの句には蛙が隠れていたのである。

落花枝にかへる（蛙）と見れば胡蝶かな

これは私の気づかない点であった。「かへる」が「蛙」とは想像さえしなかったのである。しかし、これらの学生が「かへる」を「蛙」と解しているのなら、文学理論の授業もヘチマもあったものではない。それ以前の問題である。

しかし、この、それ以前のことが実はしばしば出現する。

2003年度前期テストでは意図的に次のような設問をした。

次の詩（一部）の「春がすみ」に漢字を当てた場合に、「春が住み」「春霞」「春が澄み」が考えられますが、もちろん「正解」は一つです。正解をあげ、正解とした理由を説明しなさい。

げんげのあぜみち、春がすみ、
むこうにあの子が立っていた

あの子はげんげを持っていた、
わたしも、げんげをつんでいた。

本来の狙いは「正解とした理由」の文学理論的裏付けの理解であるが、それはそれとして、そもそも「春霞」と解せる学生は何名程か、をついでに知りたかったのである。

43名中　　春霞・34名　　春が澄む・6名　　春が住む・3名

であった。

正答率 79 パーセント　誤答率 21 パーセント

ということになる。

ただし、この問い方は「春霞」と思っていた学生に、あえて考え込ませて「春が住み」や「春が澄み」に誘導した恐れもある。

2004 年度前期の小テストでは次のように変更した。

次の詩のひらがなの部分で、漢字で表記が出来る部分は漢字に直して各行の下に書きなさい。

げんげのあぜみち、春がすみ、
むこうにあの子が立っていた

あの子はげんげを持っていた、
わたしも、げんげをつんでいた

結果は、春霞・41 名　　春が済み・1 名　　春が澄み・5 名　　春がすみ（直さない者）・8　であった。

正答率 76 パーセント　誤答率 24 パーセント

ということになる。もっとも「春がすみ」派には、「春霞」とは分かっていたが、漢字が分からなかった者もいるかもしれない。

「春がすみ」を扱った動機は、小学校の授業参観の時に詩の朗読をさせていたが、どうも担任の指導の下で、「春が　すみ」と朗読しているように思われたからである。そして上記のふたつの調査は、調査の不備な点もあろうが、深刻ではある。2004 年度の前期では、実は、この詩を別の授業で習っていた学生もある程度含まれていることを後になって知った。それでも正答率 76 パーセントである。

私など「春霞」以外に他の読み方があるなど思いもよらなかった。パソコンに向かって HARUGASUMI と打ち込むと、まず「春霞」がでてくる。もう一度変換すると「春がすみ」、さらにもう一度で「はるがすみ」。そして、次は「春霞」でくるくる回って、決して「春が住み」や「春が澄み」には変換されない。

変換ソフトもたいしたものである。MIZUGASUMI だと「水が澄み」であり、HITOGASUMI だと「人が住み」と変換するから、本当にたいしたものである。

さて、間違える学生が 2 割というのは大問題かどうかということではない。別の問題なら数値は変わるであろうし、あちらで出来た学生がこちらでは出来ないということも多々ある。いずれにせよ全く間違った理解で小中学校の授業に臨む教員は、ゼロであって欲しい。ゼロが無理でもゼロを目ざして教員養成をしたいものである。

問題は、こうした間違いをしない教員をどう減らすかということである。

文学理論の教育ならば、教えるべき理論は限定できる。理論というものは抽象的で数が限られているからである。小説における視点論が必要ならばそれを教えればいい。理論などといわなくても、俳句の基本が五七五ならそう教えればよい。たいして数多くある訳ではない。

しかし、「春がすみ」は「春霞」だ、「枝にかへる」は「枝に返る」だ、などと教えるのはどこまで対象となる語や語句の範囲を広げればいいのであろうか。「ひたいきる」が「ひた生きる」であって「額切る」ではないと教えるにしても、どこまでこの対象を広げればよいのであろうか。

教材は無限で、語や語句は有限だといっても実際にはその数は範囲の決めようがなく、無限みたいなものである。

「かえる」は「返る」で、「春がすみ」は「春霞」だという判断は、文学理論や学問の問題ではなく、いわば常識の問題である。

そして、多々学生には常識がない。つまり文学的素養がない。

では、なぜ、私は「春がすみ」は「春霞」で、「枝にかへる」は「枝に返る」だと無条件に思うかと言えば、文学作品の読書から得た無意識的経験である。先入観と言ってもよい。「春が澄む」ことが、また「枝に蛙」がいることが正しい場合にさえ、「春霞」や「枝に返る」にしてしまうかもしれない先入観。格好よくいえば、文学的素養がある、ということである。

世の中、ほとんどの文学作品ではすべてが「春霞」や「枝に返る」だから、「春がすみ」や「枝にかへる」に出逢えば、「春霞」や「枝に返る」に解してしまうだけのことでもある。「ひたいきる」に出会った私が「ひた」という語を承知しているから、副詞のそこで切って「ひた生きる」にするのであって、知らない者は、なじみのある「ひたい」まで行って「額切る」にするのであろう。

さて、読書から得た無意識的経験が豊富であれば問題は解決する。

ただ、困ったことに、すべての教員が文学作品の愛好者ではない。また、愛好者でなくても、齢を重ねて経験豊富ならば結構である。しかし、文学に趣味のない若い教員もざらにいる。

義務教育で身につけるべき文学作品に於ける語と語句一覧表などというものを文科省が作ってくれそうもないし、できもしないであろう。

では、児童生徒に嘘を教えないために教員はどうすればよいか。つまり、どのようにすればよいのだと教員養成の場で、学生を教育すればよいか。

1　教材を理解できたと思っていても、自分の理解力は未熟で、思い違いがあるということを骨身にしみてに体験的に自覚させること。

2　教材を理解できたと思っていても、かならず参考書等で確認をする習慣を身につけること。

3　そして、確認する方法を身につけること。

こんなところであろうか。